

だれでもこのパンを食べるなら

ヨハネの福音書 6章 41-51 節

はじめに

イエス様は、五つのパンと二匹の魚を増やして、五千人の人々を満腹にしました。その後、その奇跡を見た人々と対話を始められました。その対話の内容の一部が今日の聖書箇所です。

1. 天から下って来たイエス

41 節にあるように、その対話の中でイエス様は、「わたしは天から下って来たパンです」と言われました。ユダヤ人たちは、イエス様の言葉の中で、「わたしは天から下って来た」という言葉に引っ掛かります。そして「**小声で文句を言い始めた**」のです。なぜなら、42 節にあるように、ユダヤ人たちは、イエス様の家族をよく知っていたからです。彼らはこう言います。「**あれは、ヨセフの子イエスではないか。私たちは父親と母親を知っている**」。ここでのユダヤ人の中には、イエス様の故郷である「ナザレ」から来ている人たちもいたようです。彼らは、イエス様の家族をよく知っていました。イエス様の母マリアのことも、夫のヨセフのことも、そしてイエス様の子ども時代のこともよく知っていたのでしょう。ですから彼らは、イエスはヨセフとマリアから生まれた普通の人間だと思ったのです。それなのにイエス様が、「わたしは天から下って来た」と言われたので、違和感を覚えたのではないのでしょうか。彼らから見れば、イエス様は近所の青年だったのでしょう。家族ぐるみで付き合い合ってきて、幼い頃からよく知っている三十歳あまりの「イエス君」なのです。彼らは、イエス様をそば近くで見えていたので、イエス様が「天から下って来た」ということが受け入れられないのです。人間としてのイエス様をよく知っていたので、天から下って来た神の子としてのイエス様を受け入れられないのです。

これは当時のユダヤ人だけの話ではありません。現代人の多くも、イエス様をただの人間として見ているのではないのでしょうか。もちろん偉大な人物、愛を説いた聖人として多くの人は認めるでしょう。しかし天から下って来た神の子と信じる人は、多くはないでしょう。特にこの日本では、99%以上の人々がイエス様をただの人間と見ているのが現実です。近代の日本社会の中で、キリスト教は多くの貢献をしてきました。特に医療、福祉、教育の分野で、クリスチャンたちは多くの貢献をし、現代の日本人は今もその恩恵に与っているとと言えます。その意味で、日本人は伝統的なキリスト教に対して、ある意味では好意的だと思います。キリスト教は良い教えを説くと考えているようです。ですから多くの人が自分の子どもをミッションスクール入学させようとしています。しかし深入りしてはいけ

ないと考えているようです。日本人の多くは、良い教えは聞くけれど、信仰は持ちたくないのです。自分の子が良い子に育ってほしいけれど、クリスチャンにはなってほしくないのです。それはつまり、人間としてのイエス様は受け入れるけれど、神の子としてのイエス様は受け入れないというあり方です。

イエス様をどう見るかは、二千年前のユダヤ人も、現代の日本人もあまり変わりはないようです。イエス様は「天から下って来た」のかどうか、それがキリスト教の信仰のポイントです。

2. イエスのもとに来るには

では、どうしたら私たち人間は、イエス様を、天から下って来た神の子として信じることができるのでしょうか。44 節でイエス様はこう言われます。「**わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません**」。「イエス様のもとに来る」とは、「イエス様を信じる」ということです。イエス様は、神様が引き寄せてくださらなければ、誰もイエス様を信じることはできないと言われるのです。しかもイエス様はここで、神様を「父」と呼んでいます。ユダヤ人たちは、イエス様の父は「ヨセフ」だと考えていました。しかしイエス様は、「わたしの父は、唯一のまことの神様だ」と言われるのです。つまりイエス様は、「わたしはヨセフの子ではない、神の子だ」と言われるのです。

イエス様によれば、私たち人間は、自分からイエス様を、天から下って来た神の子と信じることはできないのです。神様が引き寄せてくださらなければ、誰もイエス様を信じることはできないのです。それぐらい私たち人間の心は、頑ななのです。私たち人間の心は、生まれながらに疑い深く、信仰において貧しいのです。

ここでの「引き寄せる」という言葉は、漁師たちが大漁の魚を網で「引き上げる」という時に使われる言葉です。ですから、「引き寄せる」というのは、決して簡単なことではありません。非常に力のいることです。かづくで「引き寄せる」のです。まるで運動会の綱引きで、相手チームを自分の陣地に引き寄せようようなものです。聖書の他の箇所では、「引きずり出す」（使徒 21：30）とも訳されます。私たち人間は、神様にかづくで、引きずり出されないと、イエス様のもとに来ないのだとイエス様は言われるのです。それほど、私たち人間の心は頑ななのです。それほど私たちには、自分自身からイエス様を信じることは難しく、不可能なのです。皆さんの中で、もし今イエス様を信じているという人がおられるなら、それは神様によってかづくで引き寄せられ、イエス様のもとに引きずられるようにして連れて来られ、イエス様を信じるようになったのだと思います。目には見えませんが、私たちの信仰の背後には、そのような神様の力が働いていたのだとイエス様は言われるのです。

しかしこれは、目には見えない私たちの信仰の背後で起こったことです。見に見える現実では、私たちは無理やり神様に信じさせられたわけではありません。決して暴力的に、

信仰を持たされたわけではありません。私たちは誰でも、自分たちで悩んで、考えて、結果的には自分の意志で信仰を持つのです。では私たちは、目に見える現実の中で、どのようにイエス様を信じることができるのでしょうか。45 節でイエス様はこう言われます。**「預言者の書に、『彼らはみな、神によって教えられる』と書かれています。父から聞いて学んだ者はみな、わたしのもとに来ます」。**

イエス様によれば、私たちは誰でも、神様によって直接教えられなければ、イエス様を信じることができないのです。イエス様は 43 節で、「**自分たちの間で小声で文句を言うのはやめなさい**」と言われましたが、私たちは人間同士でいくら話し合っ、教え合っても、イエス様を信じることはできないのです。私たちはクリスチャンから、また牧師からイエス様について聞き、学ぶでしょう。しかし最終的に、イエス様を信じるかどうかを決断する決め手となるのは、神様からの説得です。自分と神様との一対一の関係の中で、決断していくのです。そこが曖昧だと、その後のクリスチャンとしての歩みも曖昧になり、人に依存した信仰、つまり人につまずくと信仰を捨ててしまうものになってしまいます。私たちは、人からではなく、神様から教えられ、神様から聞いて学ばなければなりません。そのためには、「神の言葉」と呼ばれる聖書を、自分で読むことが大切です。人から聖書の話や牧師の説教を聞くというだけでなく、自分ひとりで聖書を読み、神様から直接教えられる必要があります。聖書は、今も生きている「神の言葉」です。神様は、聖書を通して、今も私たちに語りかけてきます。

もう一つ大切なことは、祈ってみることです。祈りは、神様に直接語りかけるものです。信仰を持っていなくても、まだ疑いの中にある時でも、とにかく神様に祈ってみることです。「神様。あなたが本当にいるのかどうかまだ分かりません。もし本当におられるなら、あなたが唯一の真の神様であることが分かるようにしてください」「神様。イエス様が本当に天から下って来た神の子なのかまだ分かりません。もし本当にイエス様が天から下って来た神の子なら、それがはっきりと分かるようにしてください」と祈ってみることです。イエス様は、45 節で「父から聞いて学んだ者はみな、わたしのもとに来ます」と言われましたが、ここでの「学ぶ」という言葉は、ただ単に知識として学ぶというのではなく、「確かめる」「体験する」という意味の言葉です。キリスト教の信仰は、知識だけでは持つことはできません。私たちは、神様についての知識を得るだけでは信仰を持つことはできません。私たちは、神様を経験しなければなりません。神様が今も生きていること、イエス様が真の神様であることを経験しなければなりません。祈りが答えられる経験、聖書から神様に語りかけられる経験をしなければなりません。その時私たちは、神様から、イエス様こそ天から下って来た神の子であることを説得させられるのです。私たちは、人によって支えられる信仰ではなく、神様に直接教えられる信仰でなくてはなりません。それは何も神秘的な経験をするものではありません。自分で聖書を読み、自分で祈ることです。そうして、祈りが答えられ、聖書を通して神様に語りかけられる経験をするのです。その経験が、私たちに確かな信仰へと導いていくのです。

3. いのちのパンであるイエス

47 節でイエス様は、「**信じる者は永遠のいのちを持っています**」と言われます。私たちはなぜ、イエス様を天から下って来た神の子と信じる必要があるのでしょうか。それは、「永遠のいのち」を持つためです。「永遠のいのち」とは何でしょうか。聖書の中で最も有名な言葉の一つに、ヨハネ 3：16 がありますが、そこにはこうあります。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである**」。神様は私たちに「永遠のいのち」を与えようとされました。そのためにイエス様を天からこの世に遣わされました。それは、私たちが「滅びることがない」ためです。私たちは、イエス様を信じない限り、「滅びる」と聖書は教えます。しかしイエス様を信じれば、「永遠のいのち」を持つとも教えます。聖書では、「いのち」は「神様との交わりに生きること」を意味し、「滅び」は「神様との交わりから捨てられること」を意味します。私たちは生まれながらに心が頑なで、信仰において貧しいのです。ですから誰もが「滅び」に向かっているのです。しかし私たちは、イエス様を天から下って来た神の子と信じる時、誰もが「滅び」から救われ、「永遠のいのち」が与えられるのです。

イエス様は、48-51 節でこう言われます。「**わたしはいのちのパンです。あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています**」。私たちは、「天から下って来た生けるパン」であるイエス様を信じる時、「死ぬことがない」「永遠に生きる」と言われます。それは、肉体的に死なないということではありません。イエス様を信じて、誰もが肉体的な死を経験します。「死ぬことがない」というのは、「滅びることがない」という意味で、決して神様から捨てられることはないという意味です。イエス様を信じる時、私たちは永遠に、神様との交わりの中に生かされるのです。それは、肉体的な死を経験しても、決して途切れることのない交わりです。44 節でイエス様は、「**わたしはその人を終わりの日によみがえらせます**」と言われます。「永遠のいのち」に生かされている人は、イエス様がこの地上に再び来られる「終わりの日」に、肉体的によみがえるのです。そして、魂も体も永遠に神様との交わりの中に生かされるのです。これが「永遠のいのち」です。

イエス様は 47 節で、「**信じる者は永遠のいのちを持っています**」と言われます。永遠のいのちは、やがて与えられるものではありません。イエス様を信じる時に、与えられるものです。イエス様を信じる人は、その瞬間から「新しいいのち」である「永遠のいのち」に生かされ、永遠に神様との交わりの中に生かされるのです。

おわりに

私たちは、イエス様をどう見るのでしょうか。ただの人間と見るのでしょうか。それとも天

から下って来た神の子と見るでしょうか。イエス様をどう見て、どう信じるかによって、「滅びる」か、「永遠のいのち」を持つかが分かれてくるのです。神様は、私たちを愛しておられます。それゆえに、私たちが一人も滅びることなく、永遠のいのちを持ってほしいと願っておられます。そのために、天からイエス様を遣わされました。神様は、頑なな私たちを引きずるようにして、イエス様のもとに導こうとされます。ぜひ神様に身を預けて、神様から直接教えられてみませんか？自分で聖書を読み、自分で祈り、神様を経験してみませんか？本当に神様は生きておられるのか、本当にイエス様は天から下って来た神の子なのか、確かめてみませんか？ぜひ皆さんが、「永遠のいのち」に生かされることを、心から願っています。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの心は、生まれながらに頑なで、疑い深く、信仰において貧しいものです。しかしあなたに引きずられるようにして、今信仰が与えられ、あなたを経験し、「永遠のいのち」に生かされています。あなたの願いは、一人も滅びることなく、「永遠のいのち」を持つことです。どうかここにいる皆さんが、イエス様こそ天から下って来た神の子であると信じ、「永遠のいのち」に生かされますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。